

月刊 中東レポート 第72号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03) 291-5533
編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費24000円

目次	
第二〇回PNCと中東和平会議
資料
・第二〇回パレスチナ国民会議(PNC) におけるハバシェュ博士の演説(抄訳)
・堅忍不拔を呼びかける(抄訳)
・民族統一指導部(UNL)、パレスチナ 国の呼びかけ第七四号
・第二〇回パレスチナ国民会議(PNC) 最終政治声明(全文)
重要日誌(一九九一年九月一〇日) (一〇月一〇日).....	16

九月中旬、湾岸戦争後七回目のベーカーの中東歴訪は、これまでの確認点を文書化するつめの段階へと至り、中東和平会議開催が間近いことを示した。ブッシュは「今にも歴史的突破口が開かれんとしている」と言っている。また、米国務長官ベーカーは「パレスチナ人はこの好機を逃すべきではない」「パレスチナ人、とりわけ被占領地に住んでいるパレスチナ人は和平過程から最も得ることになるし、もし参加せねば最も失うことになる」と、パレスチナ人の利益を強調しつつ、パレスチナ人抜きでも会議を開くぞ、参加姿勢を明確にせよという恫喝

PLOの要請でさらなる詰めのためアンマンへ行き、ベーカーと会談したアシュラウイ女史は、「一定の進展がみられた」「しかし、いまだ多くのなすべき仕事がある」と言っている。

一 第二〇回パレスチナ国民会議
パレスチナ革命にとって、非常に困難な条件の中で第二〇回PNCが国民会議は開催された。結果、「新情勢は、われわれに、新たな地域的・国際的因素に対して責任ある現実的な立場で臨むことを迫っている」(第二〇回PNC最

終政治声明—資料参照)という認識をしめし、

解放人民戦線　書記長は、P N Cでの演説で、
「アラフアト議長の論理に対応している。
ハバシュ氏は「米国案はパレスチナ問題をない
がしろにする計画であ」り、「アメリカ帝国主義とイスラエルの利益に奉仕するだけの罠であ
り、この和平会議なるものを通して「彼らは
われわれに、わが大義をわれわれ自身の手で
消滅させるよう要求している」という代物であつ
て、断じてこれを受け入れるわけにはいかない、
と断固たる拒否を呼びかけている。そして、パ
レスチナ人が熱望するのは、主権国家であり、
そのためにはイスラエルに対する戦いこそが問
われ、それを通してパレスチナ独立国家建設を
勝ち取ることができると、戦いの行動計画の概
略を示し、「インティファーダの拡大と強化を」
呼びかけている。その根拠としてパレスチナ和
平イニシアチブ以降の P L O の外交展開による
パレスチナ建国の道は破産したのであり、そう
である以上、これ以上の「無償」の妥協は許さ
れない」と批判を行っている（資料参照）。

同じく反対派のハワトメ D F L P（パレスチ
ナ解放民主戦線、ハワトメ派）書記長は、「P
N Cは、明確でない政策、通訳が必要なような
玉虫色の政策をとるべきではな」く、「明確に
すべきは、パレスチナの大義の防衛」であり、
「アメリカ帝国主義の和平案の拒否」以外にな
いと主張する。そしてハワトメ氏は、二二日夜
に展開された同派のヘルモン山麓での作戦を具
体例とするような「コマンド作戦の強化」をもつ

て、インティファーダに呼応し、かつ「アラブ諸国の国境を越え、アラブの軍をイスラエルの国境警備隊に変えさせないこと」をブッシュ提案への回答とすべきだと主張した。

二 問われるパレスチナ勢力の統一的対応

二 問われるパレスチナ勢力の統一的対応
PNC内部でも、和平会議への参加をめぐっては論議となっていたが、パレスチナ民族解放闘争総体としても、分裂した状態が克服されないまま、むしろ拡大することになっている。湾岸危機—湾岸戦争は、一方では、国連決議

解放人民戦線　書記長は、P.N.Cでの演説で
「ブッシュ提案の中東和平会議に反対」拒否の立
場から、アラファト議長の論理に対応している。
ハバシュ氏は「米国案はパレスチナ問題をない
がしろにする計画であ」り、「アメリカ帝国主
義とイスラエルの利益に奉仕するだけの罠であ
り、この和平会議なるものを通して「彼らは
われわれに、わが大義をわれわれ自身の手で、
消滅させるよう要求している」という代物であ
て、断じてこれを受け入れるわけにはいかない、
と断固たる拒否を呼びかけている。そして、パ
レスチナ人が熱望するのは、主権国家であり、
そのためにはイスラエルに対する戦いこそが問
われ、それを通してパレスチナ独立国家建設を
勝ち取ることができると、戦いの行動計画の概
略を示し、「インティファーダの拡大と強化を
呼びかけている。その根拠としてパレスチナ和
平イニシアチブ以降のP.L.Oの外交展開による
パレスチナ建国の道は破産したのであり、そう
である以上、これ以上の「無償」の妥協は許さ
れない」と批判を行っている（資料参照）。

て、インティファーダに呼応し、かつ「アラブ諸国の国境を越え、アラブの軍をイスラエルの国境警備隊に変えさせないこと」をブッシュ提案への回答とすべきだと主張した。

ファタに所属するカドウミPLO政治部長は、米国がイスラエルの利益を第一においているという見方には変わりはないが、ベーカーの回答の肯定面、米国とイスラエルの矛盾に示される米国の政策の変化、そしてなによりも三年前に比べて急激に「変化している国際情勢」を踏まえたとき、「われわれ自身が対応を変えること」が問われており、「わがパレスチナの土地全域への自らのデザインを隠そうともしない敵とのねばり強い交渉への準備の必要性を」語り、イスラエル内の和平派の存在を想起しつつ「われわれの活動のあり方を、方法を捉え返して」こう、と呼びかけていた。

こうした過程を経るなかで、最初はアラブアラブ支持者の間でも和平会議参加への拒否気運が強かつたといわれたPNCは、変化する国際情勢を踏まえて、ブッシュおよびゴルバチョフの主催する中東和平会議に、責任ある現実的立場で、肯定的に対応していくという趣旨の政治声明を発表した。一方で、反対派は、この声明を「アラブの立場を尊重する」として受け取った。

しかし、他方では、アメリカ帝国主義のニニシアチブを「これは決して受け入れたことを意味していないのではない」（ハバンヌ氏）「どこにものでわれわれは和平會議に参加するとは言つていない」（カドウミ氏）という解釈も存在している。しかし、これは、政治声明や、決議の言葉で推進派の行動を規制しようとする以上のものではなく、この最終政治声明がアメリカ帝国主義導の中東「和平會議」への道に入るものであることは、皆理解している。

また、アメリカ帝国主義との関係では、すでに述べたように、最終政治声明でも、「テロリズム」を拒否する立場を再度表明し、また、PLO（アッバース派）議長のアブ・アッバース氏は執行委員会から辞任することを表明した。そして、PLOは実際に、米国に交渉再開を申し入れていたのだが、米国は、一〇月一日、PLOに、PNCの決定だけでは不十分であり、まずもつてその作戦を非難すること、そしてより積極的に和平過程をつくりだすことを要求していた。アメリカ帝国主義は、PLOの和平推進派が考へるほどあまくはなく、際限のない妥協をもとめているものだ。

中東和平会議への参加の方向を打ち出した。そして、交渉を前提として条件を示し、細目とその実現においては、執行委員会をとっている。

それは、これまでの入植の停止などのパレスチナ革命側の交渉への前提条件が後退したこと、を意味する。このPNCの決定によって全関係諸国が「和平会議」への参加の方向をとることになった。

さらに、最終声明の中でも「国家テロを含む、いつさいのテロリズムを拒否する」ことを再度宣言し、また、問題となっていたPLF・アッバース派の指導者でPLIOの執行委員であるアブ・アッバース氏を執行委員から下ろしたことである。これは、アメリカ帝国主義との関係の改善に向けたジエスチャートとしてあった。アメリカ帝国主義は、PLFのテルアビブへの海上から地の攻撃を、PLIOが公式に非難しなかつたこと、その指導者を執行委員においていることなどを口実として、交渉を停止していた。PLIOが和平過程に参加するための前提とされていたものである。

PNCでは、PFLPをはじめとする左派勢力が、アラファト議長派の和平会議に反対・拒否の立場から、アラファト議長の論理に対応している。ハバシェフ氏は「米国案はパレスチナ問題をないがしろにする計画であ」り、「アメリカ帝国主義とイスラエルの利益に奉仕するだけの罠であり、この和平会議なるものを通して「彼らはわれわれに、わが大義をわれわれ自身の手で、消滅させるよう要求している」という代物であつて、断じてこれを受け入れるわけにはいかない、と断固たる拒否を呼びかけている。そして、パレスチナ人が熱望するのは、主権国家であり、そのためにはイスラエルに対する戦いこそが間われ、それを通してパレスチナ独立国家建設を勝ち取ることができると、戦いの行動計画の概略を示し、「インティファーダの拡大と強化を呼びかけている。その根拠としてパレスチナ和平ニニシアチブ以降のPLIOの外交展開によるパレスチナ建国の道は破産したのであり、そうである以上、これ以上の「無償」の妥協は許されないと批判を行っている（資料参照）。

同じく反対派のハワトメDFLP（パレスチナ解放民主戦線、ハワトメ派）書記長は、「PNCは、明確でない政策、通訳が必要なような玉虫色の政策をとるべきではな」く、「明確にすべきは、パレスチナの大義の防衛」であり、「アメリカ帝国主義の和平案の拒否」以外になら、と主張する。そしてハワトメ氏は、二三日夜に展開された同派のヘルモン山麓での作戦を昌体例とするような「コマンド作戦の強化」をもつ

中東和平会議への参加の方向を打ち出した。そして、交渉を前提として条件を示し、細目とその実現においては、執行委員会をとっている。それは、これまでの入植の停止などのパレスチナ革命側の交渉への前提条件が後退したこと、意味する。このPNCの決定によって全関係諸国が「和平会議」への参加の方向をとることになった。

さらに、最終声明の中でも「国家テロを含む、いつさいのテロリズムを拒否する」ことを再度宣言し、また、問題となっていたPLF・アッバース派の指導者でPLLOの執行委員であるアブ・アッバース氏を執行委員から下ろしたことである。これは、アメリカ帝国主義との関係の改善に向けたジェスチャーとしてあった。アメリカ帝国主義は、PLFのテルアビブへの海上からの攻撃を、PLLOが公式に非難しなかつたこと、その指導者を執行委員においていることなどを口実として、交渉を停止していた。PLOが和平過程に参加するための前提とされていたものである。

PNCでは、PFLPをはじめとする左派勢力が、アラファト議長派の和平会議への参加の方向に強く反対していたし、また、PNCへの参加を実質的に阻止された形になつた、被占領地で力を拡大しているハマスやPNSF（パレスチナ民族救済戦線）などの和平会議反対勢力も存在しており、PNCの決定はパレスチナ諸勢力、人民の一致した立場にはならなかつた。すでにPNCの開会の前からこの印半准進派

と反対派との闘争が繰り広げられていた。和平推進派であるアラファート議長の政治顧問バッサム・アブ・シャリフ氏は、PNCの開催を前に、その結果を「強固な反対、われわれはもちろんその意見を尊重するのだが、にもかかわらず、圧倒的多数が和平会議へのパレスチナ人の参加を支持することになる」と予測した。一方、反対派は、ヨルダン内の「一」のパレスチナ・キャンプの九万三〇〇〇名の署名を伴うアピールを発表し、「われわれは、わが人民はPLOを（独立した正式の代表として）含めない交渉や合意のいかなるものにも責任をとらない」「（ブッシュの提案は）パレスチナ人民の正当な権利の代償として、アラブ－イスラエル対立を解消しようという欺瞞的で投降的なもの」と、和平への拒否を要求している。そのアピールには、さらに、レバノン、シリアその他のキャンプ住民などの一八万名の署名が追加される、と付け加えていた。

ヨルダンの左派で形成されているJANDAは、「二二一日、PNCに向けて、「米国の提案が、アラブ・パレスチナ人の要求の最低線にも合致せず、パレスチナ人の基本的権利に応ええない方向にあることは、すべてのこととに示されている」「われわれは米国の態度を非難するとともに、パレスチナ人が独立した代表団を組織し、他の諸国と同等の立場で参加し、自決と祖国への帰還といった権利をもつ人々であること認めようとしている会議には、誰も参加すべきではない」と繰り返す「二二二」を送つてゐる。

アラファート議長は開会演説で、「われわれがすることを、皆に告げよう」だが「われわれはこの和平會議開催を妨げている障害物を取り除くことにやぶさかではないことも告げる」「われわれは八八年以來和平への道を選んだ」「われわれは、この地域の人々の願望である、正当で安定し安全な和平の実現のため、和平會議を開催を國際的な協力によって成功させるために、働く用意があることを再表明」し、パレスチナ人の民族的な權利を防衛するために、中東和平會議に臨む姿勢を示した。

八八年一月の第一九回PNCで採択された「PLOの平和イニシアチブ」とその結果として翌月から開始された米国との対話¹¹交渉は、いろいろな論議を生んだが、インティファーダが米政府をして、PLOとの討議に踏みだすきっかけをついた。PLOが米国の条件を認めることによって開始されたこの討議は、アメリカ帝国主義とイスラエルとの矛盾をつくることにもなった。アラファート議長はそうしたことを踏まえ、そして今、ソ連・東欧および湾岸戦争後の情勢の急展開とブッシュの一〇〇億ドル信用供与の四ヵ月延期提案をめぐってアメリカ帝国主義とイスラエルとの矛盾が大きくなっていることを捉えて、PLOがふたたびイニシアチブをもって、より積極的に関わっていくなかで、パレスチナ人の民族的權利を防衛する、という立場に立っている。

やいかなる指導部の財産でもなく、アラブ・パレスチナ人のものである。パレスチナの土地はイスラムの土地であり、誰もこれを放棄する権利はない」と非難し、さらに、「パレスチナへの道は、ワシントンやモスクワを経由するものではなく、自由の戦士の血とともにある」と、闘いのなかでパレスチナ全土の解放と独立を勝ち取ることを主張した。

ハマスは、被占領地内では民族統一指導部に对抗するまでに勢力をのばしてきた。PNC 参加条件として、第一九回 PNC 決議の撤回と議席の四〇パーセントを要求していたといわれていたが、九月三〇日に、やはり非難声明を発表している。「PNC 決議は、わが人民の熱望をなんら代表していない」、和平会議は「パレスチナおよびエルサレムを売る会議」であり、そうした「投降的会議への PLO の参加合意はアメリカ帝国主義とイスラエルへの屈服といふ」明確な回答であり、アメリカ帝国主義との対話を再開しようと PLO の絶望的努力の一部としてある」「われわれはすべてのパレスチナの党派、人士に、いまこそ闘いを強めんことを決議はわれわれを代表していいことを知らしめん!」ことを呼びかけている。

だが拒否派がいうようなボイコットをすれば PLO は国際的なステータスを失うことになり、結局一言でいえば、参加しつつ闘争するという方法しかない。すなわち、被占領地のインティファーダの拡大、強化と国際的政治的闘いをもつ

て、よりパレスチナの大義への共感と支持をとりつけつつ、交渉を少しでも有利な方向へと牽引していくことである。

三 パレスチナ革命をとりまく情勢

また、推進派は、和平會議へのパレスチナの存在を実現しようとするほど、アメリカ帝国主義と妥協せざるをえない条件におかれたり、PNCの中でのハバシ書記長がヘーカーの示唆として述べた「パレスチナ人は自治以上のものは獲得できず、最良の場合でも、ヨルダントとの連邦形成でしかないこと」は明確であり、しかも、イスラエルは何らの譲歩らしい譲歩を行っていないという条件に置かれている。

アラファト議長派は、「米国の代表のひとりが、ある会議のとき、われわれの代表に、すべてのアラブが負けたのだ。イラクだけではない。だから諸君はイスラエルの条件を認めねばならない」と語ったと暴露しているが、まさに、そこに現在の和平過程の本質が存在している。

アメリカ帝国主義ブッシュ政権は、九月六日、米国議会に一〇〇億ドルの信用供与の四ヵ月間延期を提案し、これをめぐってユダヤロビーの暗躍をはじめ、激しい攻防が展開されていた。しかし、このブッシュの信用供与の延期は、アラブ側の顔を立てるものでしかないことは、ベーカーがシャミールに示したといわれる六項目の保証の内容でも明らかである。しかし、そのようなものに対してもイスラエルは、合意を渋っていた。これは、明らかにイスラエルの立場を安易な妥協によつて弱めず、アラブ側の妥協を引き出すためであつた。

アラブ側は、「セツルメント建設の続行は和平への障害物」（シャラー・シリアル外相）「イス

の未解決問題としてある中東和平問題を再びクローズアップさせたが、他方では、アメリカ帝国主義の一元的世界支配としての新世界秩序確立を進展させ、パレスチナ人民の唯一合法的な代表として国際的に承認されたPLOの無視を結果せしめようとしている。アメリカ帝国主義とイスラエルが、PLOを交渉対象から排除せんと策謀していることは、誰の目にも明らかなことである。

したがって、中東和平過程で正当な位置を、パレスチナの統一した力で確保すること、敵の策謀を打ち破る民族的な團結の立場を確立することが問われていた。そうした基本点においては、すべて勢力が一致していた。だが、アメリカ帝国主義主導の「和平會議」への動きにどのような態度をとるのかで、大きな違いができるとした。

アラファト議長に代表される主流派は、アメリカ帝国主義とシオニストが出していくる条件の枠内でも、和平會議への参加をもって、パレスチナ人の願望を少しでも満たしていくことをしていた。

第一九回PNCでは安保理決議二四二、三三八を承認することを決定し、イスラエルの存在を認めた。さらにはアメリカ帝国主義の要求である「テロ」放棄宣言とイスラエルとの平和共存に同意し、米国との対話の道を開いた。「新世界秩序のもとでは民族的な政治的人間の権利の強奪、剥奪は許されない」希望的とも言える判断から米国案などに「肯定的に応じていく

ことによって、「イスラエルが仕掛けてくる陸害を除去する」ことが可能とらえていたわである。だが、第一回PNCが、インティファーダの高揚、その高揚によってアメリカ帝王主義への突きつけを背景とし、ゆえに、和平工作を基調とすることの大きな反対がなかったのに比べ、国際的な情勢自身が、アメリカ帝国主義との同盟者に有利となり、それに反対するものは、生存自身があやうくなるという状況のなかでもの問題である。そうであるからこそ、和平への反対も、統一の必要性とともに強まるという矛盾になつたのだ。だが、すべての勢力が民族的な統一をつくりだすことによってしか、現在の情勢を切り開くことはできないのは事実であり、実際PNCに至るまで、その統一の機運は高まっていた。この機運は、PLOとPNSFだけなく、被占領地のPLO反対勢力となつてゐるハマスなども含めたものであつた。

このため、PLOとPNSFは、交渉を行い、いつたん、PNCの統一大会が開かれる条件ができるたが、それをアラファト議長が拒否し、PNCをPLO内だけで強行した。

ファーフームPNSF(パレスチナ民族救済戦線)議長は、九月一六日、アルジェリアのホリゾン紙に、統一PNCに向けて交渉してきただが、合意に達しないまま、アラファト議長が日程を決めてしまつた、もつと討議を尽くすなかで一致をつくるべきだし、自分はそれが可能だと考えるが、こういう状況では、われわれはボイコットせざるを得ない、つづらうござなによく、

FRC（ファタハ革命評議会）もハマスもボイコットすることを、わたしは明らかにする、と述べている。ファーフーム氏は、暗にアラファト議長があえて合意をつくるうとしたこと批判している。

アラファト議長にとつては、パレスチナ独自代表という参加形態にこだわらないという方向で牽引していくことをすると、PNSFやハマスなどはPNCに参加していないほうが、都合がいいということになる。

すべての勢力が統一をもとめ、パレスチナの大義の抹殺に対しても力を合わせることの必要性を認識しているときに、このような否定的態度をとったことは、今回の分裂を深刻なものとしている。

PNC後、GCのジブリル書記長、ファタハ反乱派のアブ・ムーサ大佐は、ハズバッラーのアッバース・ムサヴィィ師と共同記者会見し、アメリカ帝国主義が推進する中東和平會議を決して支持しない、それはイスラエルへの全面的投降になると、PNCが受け入れたことを強く非難する、と発表している。

ジブリル氏はさらに、「PNCはパレスチナの大義を裏切った」「（安保理決議）二四二」を受け入れることによって（前回の）PNCはわが祖国の大地の八〇パーセントを放棄した。そして今回のPNCはパレスチナの大義を抹殺することをもくろむアメリカ帝国主義の提案を受け入れることによって、新しい妥協、屈服を行つた」と「（アラファト議長）によれば、アラ

また、推進派は、和平會議へのパレスチナの存在を實現しようとすればするほど、アメリカ帝国主義と妥協せざるをえない条件におかれたり、P.N.C.の中でのハバシ書記長が「一カ年の示唆として述べた「パレスチナ人は自治以上のものは獲得できず、最良の場合でも、ヨルダンとの連邦形成でしかないと」は明確であり、しかも、イスラエルは何らの譲歩らしい譲歩を行っていないという条件に置かれている。

アラファト議長派は、「米国の代表のひとりが、ある会議のとき、われわれの代表に、すべてのアラブが負けたのだ。イラクだけではない。だから諸君はイスラエルの条件を認めねばならない」と語ったと暴露しているが、まさに、そこに現在の和平過程の本質が存在している。

アメリカ帝国主義ブッシュ政権は、九月六日、米国議会に一〇〇億ドルの信用供与の四ヵ月間延期を提案し、これをめぐってユダヤロビーの暗躍をはじめ、激しい攻防が展開されていた。しかし、このブッシュの信用供与の延期は、アラブ側の顔を立てるものでしかないことは、ベーカーがシャミールに示したといわれる六項目の保証の内容でも明らかである。しかし、そのようなものに対してもイスラエルは、合意を渉っていた。これは、明らかにイスラエルの立場を安易な妥協によって弱めず、アラブ側の妥協を引き出すためであった。

アラブ側は、「セツルメント建設の続行は和平への障害物」（シャラーム・シリアル外相）「イス

は、七月にはヨルダンへの三五〇〇万ドルの経済援助を再開し、九月二七日には議会に二一〇〇万ドルの軍事援助の再開をはかっている。

しかし、和平会議に前向きな姿勢を公然と言っているのは、フセイン国王のみとさえいわれ、PNC決議によって救われた形になったとはいえ、一〇月八日においても、ヨルダン政府高官が「われわれは皆、ヨルダンがそのサバイバルのために、交渉のテーブルにつくしか選択はないことを知っている。が、明確にそう言うことを（フセイン国王以外は）ためらっている」という状況である。

和平反対の閣僚四名を抱えていたのを、PNC決議後の一〇月三日に内閣改造を行つて新しい外相に、和平推進派を据えた。この外相が、ヨルダン－パレスチナ合同代表団の團長を務めることになるので、中東和平会議への態勢を整えたわけである。それに先立つて、ハッサン皇太子は、パレスチナへの支援であつて、代弁するのではないこと、ましてやパレスチナを併合する意図などないことを、一〇月一日に、強調している。

そしてフセイン国王は、一〇月一〇日に国民的大会を開催して、和平会議への支持気運を盛り上げようとした。だが、一〇月七日に、下院議員八〇名中四九名が内閣総辞職を要求する署名を提出。国会の会期外なので、それは有効ではないとしているが、形勢有利ならずとみたのか、フセインの病気を理由に、その大会を延期すると発表している。同時に、一一日に予定さ

唯一の和平反対を公然と表明しているのはイランである。ハメナイ師が「PNCの決定はパレスチナ人を売り飛ばし、辱めることを目的としたもの」であり、「パレスチナの大義への裏切り行為」であると非難している。

四 結び

第二〇回 PNCは、アメリカ帝国主義主導の和平会議に参加する方向をとった。しかし、その方向は、パレスチナの民族的統一を促進するよりは、パレスチナ革命の分裂を拡大する結果となつた。和平会議への参加の前途にあるのは、パレスチナ建国ではない。

しかし、アラブ諸国、パレスチナが置かれている状況は、根本的に変わっており、現在の和平過程に参加を拒否することによっても、パレスチナ建国の未来を実現することは、困難である。それは、パレスチナが政治的に抹殺されることを意味し、これまで作り上げてきた国際的なパレスチナ革命の地位をさらに後退させることになる。そして、アメリカ帝国主義とシオニストに革命自身を抹殺させる条件を与えることになるだろう。

和平交渉と人民の戦闘的な闘い自身は矛盾するものではない。問題は、これまでもアメリカ帝国主義、シオニストから、和平交渉か、闘いの圧殺かを突きつけられる度に、パレスチナ革

第四
回

唯一の和平反対を公然と表明しているのはイランである。ハメナイ師が「PNCの決定はパレスチナ人を売り飛ばし、辱めることを目的としたもの」であり、「パレスチナの大義への裏切り行為」であると非難している。

四 結び

第二〇回 PNCは、アメリカ帝国主義主導の和平会議に参加する方向をとった。しかし、その方向は、パレスチナの民族的統一を促進するよりは、パレスチナ革命の分裂を拡大する結果となつた。和平会議への参加の前途にあるのは、パレスチナ建国ではない。

しかし、アラブ諸国、パレスチナが置かれている状況は、根本的に変わっており、現在の和平過程に参加を拒否することによっても、パレスチナ建国の未来を実現することは、困難である。それは、パレスチナが政治的に抹殺されることを意味し、これまで作り上げてきた国際的なパレスチナ革命の地位をさらに後退させることになる。そして、アメリカ帝国主義とシオニストに革命自身を抹殺させる条件を与えることになるだろう。

和平交渉と人民の戦闘的な闘い自身は矛盾するものではない。問題は、これまでもアメリカ帝国主義、シオニストから、和平交渉か、闘いの圧殺かを突きつけられる度に、パレスチナ革

命自身が大きく二つの傾向に分裂してきたことである。革命の根本的な力は人民にしかなく、人民の闘争が基盤となって、交渉においても獲得するものがうまれるのだという根本的の共有がいまほど深刻に求められている時はない。

現在の情勢のなかでは、和平過程においてパレスチナ革命を抹殺させないために、参加することが必要であり、また、それを有利にし、次の闘いの発展をつくりだすために、インティファーダを強化・拡大すること。この二つがあつて、現在の情勢を切り開くことができるのである。

PNCの最終政治声明にも、そのことが盛り込まれている。しかし、問題は、現在の情勢のなかで、敗北主義的な形で、その一方だけが進行する危険がなお存在している。また、被占領地内のパレスチナ革命の全勢力が統一できず、分裂を続けるという最大の危険も存在している。パレスチナ革命の民族的な統一、パレスチナ革命の歴史の教訓として、今こそそれを、実践することが問われている。

資料

第一〇回 パレスチナ国民會議(P.N.C.)におけるハバシュ博士の演説(抄訳)

1991年11月30日 第72号 月刊 由東レポート

それを示すかのように、九月十五日、シヤミルは新しいセツルメントの起工式に参列し、「建設可能なすべてのわが領土において、水平線の結果までユダヤによる住居を！」と叫んでいた。二九日にも、前日エイタン農相が、和平会議反対の脅しをかけたのを背景に、ふたたび、被占領地のセツルメント凍結を断固拒否すると強調している。

また、イラクをはじめとする五カ国への領空侵犯飛行が、一〇月八日、イラクによって安保理に提訴された。アメリカ帝国主義も、「そうした行動は和平過程を妨害するものだ」と遺憾の意を表明せざるをえない行動であった。

ブッシュの対応は、五六年の第二次中東戦争に見せたアイゼンハワーの対イスラエル強硬姿勢以来のものといわれ、一〇月一日、議会もそれを承認している。しかし、これは決してアメリカ帝国主義が、親アラブになつたわけではなく、新世界秩序確立の一環として、アラブ＝イスラエルの統合支配として策謀していることである。それは、九月三日の国連総会でのブッシュ演説で、「シオニズム＝人種差別主義」と非難した七五年国連総会決議の撤回を提案して

アラブ諸国は、「新世界秩序」のなかで、アメリカ帝国主義との協調関係のなかにしか生えないと条件がないことを知っている。サッダムの運命は、アラブ諸国総体に与えた「教訓」である。シリアのように、それを見通して、すでに湾岸戦争においても、アメリカ帝国主義の側につくことで、サッダムの運命を回避したし、また現在のアメリカ帝国主義主導の和平過程への参加もそれを見通したものである。

とりわけ、シリアは、ソ連の超大国としての力を背景にして、アメリカ帝国主義を背景とするイスラエルとの「戦略的均衡」をつくりだしている。そこで領土問題の交渉がなりたつという立場にたっている。ゴルバチョフ路線、そして、クレーテーによるソ連の連邦としての解体とソ連共产党の解体は、もはや、これまでの路線にもどれないことを示している。そして、そのなかでの生き延びる道は、アメリカ帝国主義との協調関係の中にしかない。

現在の情勢は、エジプトが、キャンプ・デービッド合意を行った時よりも条件が悪く、現在では「和平」内容をより有利にできるからである。

交渉するしかない状態におかれている。

レバノンは、南部でのパレスチナの軍事存在を解体し、アメリカ帝国主義、シオニストにジエジンからの撤退を要求したが、その兆候すら引き出せていない。南部の回復、安保理決議四二五の適用が、レバノンにとつては大きな課題である。レバノン政府は「四二五は、二四一、三八と違つて、アラブ諸国とイスラエルとの戦争の結果採択されたのではない」ことを強調し、「即時、無条件の撤退」を適用すべきと主張している。

八九年九月のタエフ合意以降、米国はタエフ合意支持、四二五支持を言つてきた。だが、ハラウイ大統領らの訪米は、アメリカ帝国主義が四二五の履行を中心に置いていないことが明確になつてゐる。

八八年七月に西岸における主権の放棄宣言を行つたフセイン・ヨルダン国王は、湾岸戦争での失地挽回、ふたたび親米派としての本領発揮のチャンス到来とでもいわんばかりに、PNCの前進を通して、パレスチナ人に「和平の好機」を説いてゐる。

その努力を讃えるかのように、ブッシュ政権

テエルが新たなセツルメント建設を停止したところのみ、和平過程は成立する」（エジプト外相と主張しており、そこからブッシュ提案を前向きなものと評価している。しかし、それは、アラブ諸国にとっても強いられた選択の中での評価であって、アラブ側の有利になる条件は提

いることに、そして何よりも、パレスチナ政策をはじめとする中東政策、和平の内容において示されている。

の力関係では、領土の回復自身が怪しい状態である。イスラエルは「和平会議」への参加の条件として領土問題を中心とした会議は拒否すると表明しており、話し合うことすら拒否する態度を示している。シリアは、人質問題の解決や、レバノン問題などでしかなくなつており、そし

動に移すよう呼びかけるものである。この任務の完遂に向け、われわれは以下のことをなさねばならない。

1. イスラエルに最大の人的、経済的損失を強いるため、インティファーダの継続のみならず、そのエスカレーションにも真剣に取り組むこと。
2. そのためにはますもって、インティファーダが直面する組織的、経済的諸問題の解決に真摯に着手しなければならない。
3. 代価なき無償の妥協は、いっさい与えられはならない。むしろ、国際的合法性に基づいてはならない。
4. 全世界に散開した六〇〇万パレスチナ人の能力を動員するために、また、全世界に対してその意志を貫徹しうる一つの現実的、能動的力へと彼らを転化するために、PLOの諸機関内における実際の、眞の民主的改革を大規模に押し進め始めなければならない。
5. アラブ地域におけるわれわれの闘いの政府レベル、民衆レベル双方にわたっての活性化。
6. 政治・外交活動を無視することなく、だが優先権は、暴力的、非暴力的な戦闘的行動、ならびに、多重な形態をとるインティファーダの諸活動に与えられなければならない。

事実、独立の宣言と達成との間にある落差を埋めるものは、長期にわたる幅広い戦闘的過程である。

二、政治情勢

二、政治情勢

な、劇的な質的变化がアラブ世界においても、国際的にも生起した。われわれは今、一つの超大国のみ存在する世界に取り込まれている。この米国支配は、今後長期にわたって続くだろう。

政府レベルにおいては、われわれアラブは、後退と分裂、さらには解体の状態にあるといえる。こうした状況に反旗を翻したイラクの試みは不幸にも失敗に終わり、それらを踏まえたブッシュとベーカーは、パレスチナの大義の解決ではなく、解消の提案を行っている。しかし、彼らの言う通り、今は中東の紛争に終止符を打つ絶好機なのだ。ベーカーは、この間の最後の歴訪で、パレスチナ人は自治以上のものを獲得できず、最良の場合でもヨルダンとの連邦形成でしかないことを露骨に示したではないか。それだけではない。自決もましてやパレスチナ国家など絶対にありえないことを明々白々なものとし、解決の過程では、交渉が継続され、エルサレムの将来は第二段階で取り扱われることとしたのだ。

陰謀の概観は以上の通りだが、これを流産させるためには、二つのことがわれわれに必要とされる。一つは、人民の団結を確保する明確な政治的な立場だ。そして、もう一つは、われわれの国家と国連諸決議とを力強くでも実現しうるような力関係の段階的変化を可能とする戦闘的計画である。政治的立場について言えば、それは、米国の陰謀的な「和平」案と一〇月までは、全國連決議に

基づいているとわれわれが考えるパレスチナ平和イニシアチブが蘇り、繰り返し強調されなければならない。

ここに私は、PFLPを代表し、PNCが米国への投降勧告案を拒否し、代わって、合同代表団を認めず、PLOを唯一正当のパレスチナ代表として含む国際和平会議開催を基調としたパレスチナ平和イニシアチブを掲げて進むよう、提案するものである。

民族的統一の責任が諸君一人、一人にかかる。なぜならば、われわれの民族的統一とはパレスチナの諸原則によっているのであり、もしそれら諸原則が破られるならば、開会に先立つ話し合いで全員が一致した通り、統一は投降と裏切りの野合でしかなくなるだろうからである。

さて、ここでパレスチナの諸原則中の第一番目のものを強調しておきたいのだが、それは、現在すべての圧力が集中している代表権問題に関するもので、この点についてのいかなる無償の妥協もあつてはならないと私は警告する。それは陰謀への関与の第一歩とみなされる。代表権の問題は、一部の人々が言うような構成上の問題ではないのだ。

明快な政治的立場の確立の上にたって、われわれは、次に力関係の段階的変化をもたらしうる——それは、翻って、パレスチナの平和イニシアチブの復活を可能ならしめる——工作計画の具体化に集中しなければならない。主要な項目はインティファーダ、民族的団結、民主化の手順、

— 9 —

われらが人民のインティファーダは、建国のスローガンを、文字の世界から現実の世界へと転位させた。以来一すなわち、われらが闘争の重心が被占領地に移行して以来、あるいは被占領地が闘いの主要な環となつて以来、あるいは、老若男女を問わず、われらが大衆すべてが決起し、もってインティファーダに大衆的、民主的芳香を与えて以来、われわれはこのスローガンが、見通せる範囲内の将来において実現しうるものになったことを認識しはじめた。このことに関し、諸君は、ヨルダン国王フセインのとつた処置を紛れもなく思い起こさだらう。インティファーダの意味するところをはつきりとつかんだ彼は、その結果として、西岸との関係を断ち切る決定を行つたのだ。それに続いてP.N.C.がここアルジエで開かれ、独立宣言が発せられたが、もちろん、両者の間に何らの暗合が存在したわけではない。むしろ、パレスチナ国家が現実性を獲得したことにより、国王決定と独立宣言という両者がともども生まれたと見るべきである。いずれにせよ、その時をもつて、スローガンの実現をめぐり、二つの見解が存在することになった。

P.L.O.の公式指導部が一つの見解をとり、諸君が反対派と呼ぶところの、P.F.L.P.を含む他の勢力がいま一つの見解をとつた。さて、ここで言わせてもらいたいことは、P.L.O.の政治路線を総括する目的は、闘争、大義、人民、つまりわれわれすべてを利する教訓の学習にあるということだ。他に何らの困惑もわれわれこない

ことを確信して欲しい

PLO指導部は、

PFLO指導部は、デタントにある国際環境下では、インティファーダとそれへの国際的支援の持続をもつてするならば、建国は間もなく可能であるうと考えた。この政治路線の展開のために条件を整え、それを促進するには、われわれPFLPが「無償の」という言葉を付け加えて呼ぶ妥協が有効であり、必要でさえあつただろ。イスラエルの生存権を認めた安保理決議「一四二」の承認をはじめ、「テロリズム」の放棄、パレスチナ国民憲章の見直しの用意、非武装国家への合意等々は、これによつて説明されるし、そこから外交と政治行動をわれわれの闘いの主要な環であり戦術と考えることも、また、当然ではあつた。

この政策の四年間を経て、われわれは、パレスチナ国家に八八年当時以上には接近していく——こう結論づけるのは、われわれの権利と思われる。より科学的たるべく、私は、この結論を現実に立脚して導きだしたのであり、PFLPが早急なPNCの開催を求めた理由もここにある。すなわち、総括と新戦術の確立のためであり、外交・政治活動との関係に配慮しつつ、主要には大衆の戦闘的行動に基盤をおいた戦闘的行動計画の確定のためである。

総括からは、以下の教訓が学ばれ、今後の活動に生かさなければならない。

のもので、その重要性は、なぜならば、経済的、物質的消耗を強いられない限り、敵に「イスラエルの地」を「インチなりとも放棄する気はなく、そればかりかとどまるところを知らぬ右傾化が進んでおり、「一方これまででさえ、端役以上の役割を演じてこなかつたイスラエルの平和勢力は、日を追つて弱体化しているからである。敵に新たな挑戦をつきつける戦闘的行動計画による以外こうした状況の変革是不可能だろう。

2. 敵シオニストの帝国主義一般との、とりわけアメリカ帝国主義との関係の本質、およびこの同盟におけるシオニズムの比重の増加。ドゥライト・アイゼンハワーの電話での有名な言葉を借りて換言するなら、「情勢は五六年当時とは完全のことなっている」のだ。

3. 民族的要因は今なお国際的な要因よりも重要である。

4. 正しさを証明された諸原則を思い起こすのみならず、それに従うことの重要性。

たとえば「力で奪われたものは、力以外で取り戻せない」「占領は強制されぬ限り終らない」「交渉が力関係とは異なった結果を生むことはない」——もちろん、ここで私は「力関係」という言葉を厳密に軍事的な意味に限つて使つていいわけではないが、ともあれ、イスラエルは、毎日兵士五名を失うようになったときに、レバノンからの撤退を余儀なくされたのだ。

以上の諸事実に鑑み、私は、PLO指導部に対し、建国国を戦闘的任務と考える今ひとつの見解にそつて、ペレス（西園三郎）、「ゲン三郎

— 9 — — 8 —

時までの営業

☆ 一二三日：市街地、市場、宗教施設の清掃を行ふ労働奉仕日。

☆ 二四日：婦人同盟は殉難者、拘留者、負傷者の家族とともにエルサレムの聖地、史跡を集団訪問し、街壁内での女性ストを行うこと。

☆ 二五、二六日：すべての民族的、宗教的あるいは大衆的指導者、および全職能団体、労働組合、社会団体等の代表は聖地エルサレムの位置に関する話し合いのため、アル・アクサ寺院に集まること。学校・クラブ等は同市の聖跡史跡への旅行を組織すること。

☆ 二七日：パレスチナの全同教徒によるアル・アクサでの金曜礼拝。

あつせんしている二、三の旅行会社に対し、かかる行為はエルサレムのアラブ的・回教的性格を歪めて伝えようとする敵のキャンペーンに寄与するものである、と警告する。各社は同市の当該職能団体を通して、パレスチナ人をもってその業務にあてねばならない。なお、この機会を借りて、UNLはエルサレムの全旅行業者に對し、観光振興策を策定する委員会を設置し、ECの助成金に頼らないようにすることを訴え
る。

二八日：労働者、学生、婦人の全組織・全団体による街壁内デモ。

☆ 二九日：パレスチナの全キリスト教徒による市内の教会での日曜礼拝。

☆ 一九日：市防衛策を検討するための回教徒・キリスト教徒会議をこの日に開催するよう U N はよびかける。すべての民族的勢力、宗派がこの会議の成功に向けて最善をつくすよう訴え

2. 対占領戦線

2
支占領戰線

九月十五日 U.N.L.は冬時間への移行を宣言した。時計を六〇分、遅らせること。・新学年次の始まりにあたり、学生諸君の学業継続を求める。われらが人民の死活をかけた闘争において、教育はきわめて重要な武器であり、教育機關閉鎖の機会を敵に与えぬよう訴える。この点に関し、U.N.L.は裏表のある行動を

☆二三四日：市街地、市場、宗教施設の清掃を行ふ労働奉仕日。

今年こそ終わりにするよう再度訴えるとともに、各学生委員会が、授業の妨げとなるような試みに対し厳しく対処するよう求めるものである。

- ・ シオニストとその手先は、現在ガザにおいてみられることだが、覆面を用いて一般市民の

居住を襲い財産を奪うという行為をとり始めて
いる。それゆえUNLは覆面の使用をイスラエル軍、および入植者との対決に限るとのよびかけを再度ここに行い、この指示に反する者に対しては民族路線からの逸脱者とみなして追跡するよう、よびかける。
・UNLは、大衆の意志に応え、ベツレヘムの工業会議所選挙で棄権した生産者たちに称賛

・ U N L は、パレスチナ全土の地主が人民の経済状態を考慮し、高い地代をとらぬことを呼びかけているが、これに関連し、以前に出された U N L の決議を遵守するよう、改めて訴える。すなわち、占領政策による被害者、並びに各地域で民族的委員会と協力を決定した者については、地代を二五%引き下げる事である。同時に、借地人においては地代を期限内に支払うことが求められる。

・ 占領当局の政策にそつて、シオニストの入植者がヘブロン中心部にプレハブ住宅を多数つくっている。この挑発と財産侵害はパレスチナ

を送る。また、未だ選挙を行っていない商業会議所では選挙準備のための総会を早急に開くよう再度訴える。

・ いくつかの軍事的、社会的理由から、U N I Sはスポーツ、青年キャンプ、社交クラブ、スカウト運動といった日常活動のパレスチナ全土での再活性化が必要と考えている。

・ U N I Sは、刑務所当局による最大の抑圧と専横に抗し、ハンストを継続している女性拘禁者たちに称賛を送る。われらが大衆、特に婦人組織が九月の第一週をシオニストのバースチーユに囚われているわかれらが男女との連帯活動にあてるようこの機会によりかけた。

・ 占領当局は、最近、パレスチナ人元警察官に対して、辞職撤回・復職の圧力を改めてかけてきている。U N I Sは彼らの民族的意志を堅持した立場を高く評価し、こうした圧力に屈せず、

とするべきであり、最後の項目は、アラブの内外により多くの友人をつくりだす闘いに加え、自決権のストーランの下にも全世界六〇〇万のパレスチナ人を実際に結集させうるものとするべきである。

堅忍不拔を呼びかける（抄訳）
民族統一指導部（UNL）、

ハレスチナ国の呼びかけ第七四号

大きな犠牲を伴いながらも、また敵シオニストによる弾圧の厳しさ、その手口のあれこれにかかわらず、祝福されたインティファーダは四六ヶ月を経た今なお、決意した自由と独立への道をつき進んでいる。

和平提案に対ししてさえ真摯であるとはどうい
言えない、彼らは中東の公正にして包括的かつ
恒久的な平和の条件と与件を用意するという必
要な反応を今もって示していないことからもそ
れは明らかではないか、と。

われわれの立場からいえば、いかなる和平も、
国際的に合法とされる諸決議が要求するものの
履行、すなわち、エルサレムを含む全占領地か
らのイスラエルの撤退並びに帰還、自決、建国
といったパレスチナ人民の政治的、民族的諸権
利の実現を中心をおいたものでなければならぬ、
パレスチナ代表権問題もまたこうした基礎にし
たがって解決されねばならない。

われわれは特別に言及しないわけにはいかない。会談自身に関してはパレスチナ各派の見解にも相違があるが、UNLは民主的討論こそ民族的路線に基づく團結を強化する唯一の正しい方法であると認めており、かかる脅迫行為を強く非難するものである。われわれはむしろ適正な諸機関で採択された民族的諸原則に基づいて團結の基礎を固めること、民族的立場を保ち被占領地内外に限らずPLOの単独代表権を守るために團結を堅持することをわれらが人民大衆に対し呼びかけねばならない。

われらが戦闘的大衆へ

UNLは以下の重要な問題につき、その立場を明確にしたい。

1. エルサレム

敵シオニストは、パレスチナ人口の漸減によるエルサレムの意図的なユダヤ化を続けている。旧市街の周囲にセキュリティ・ベルトを引き、周辺のパレスチナ人家屋を占拠することを通して、元来の居住者を一掃しようとしているのだ。この計画に対し、われらが大衆が以下のように闘うこと訴える。

①ユダヤ人に不動産を売却する者は誰であれ処刑されるべきこと。

敵シオニスト

るエルサレムの意図的なユダヤ化を続けている。旧市街の周囲にセキュリティ・ベルトを引き、周辺のパレスチナ人家屋を占拠することを通して、元来の居住者を一掃しようとしているのだ。この計画に対し、われらが大衆が以下のように闘うこと訴える。

①ユダヤ人に不動産を売却する者は誰であれ処刑されるべきこと。

③エルサレムおよび近郊の地主・家主においてはわれらが人民の経済的困窮を考慮し、自己の利益を追求するあまり、われらが国民に同地域からの退去を余儀なくせしめ、もつて敵の市空洞化計画を利することのないよう訴える。店主にローヤリティを課し続け、結果として高額な賃貸料を米ドルやデニナールで求める地主は、UNLの警告の対象である。

④西岸およびガザ回廊に住む数千の人々のエルサレム訪問が妨害されていることに端的に示される通り、敵はエルサレム孤立化のベルトをつくっている。UNLはグリーンライン内に住む堅忍不拔の人々に対し、民族的・宗教的・歴史的責任として、市への定期的・集団的訪問を組織し、このベルトを打ち破るよう訴える。

⑤エルサレム委員会、イスラム寄贈財団（I E A）各種慈善・福祉団体にあつては、エルサレム、特に旧市街に住み続いている人々への援助を可能な限り拡大するよう訴える。エルサレムの住民は、不満や要望があるならば現地のパレスチナ新聞に訴えてもらいたい。われわれはそれを最高のレベルをもつて検討するだろう。

⑥UNLは外国人観光客のエルサレム訪問に

②旧市街にある家屋の不在家主は、敵による接收—移住者への譲渡を妨げるため、同所に帰還、居住すること。同様に閉鎖中の店舗の所有者もアラブの商活動を維持するため、再開店、もしくは信頼に足る（パレスチナ）人への賃貸を行うこと。

かれた、闘争の新段階である。PLOとわれらが諸権利とへの国際的承認は打ち固められた。八八年一月、PLOは、この国際的支援と注視の機を逃すことなく、第一回PNCを開催した。会議は平和イニシアチブを通じて、エルサレムのユダヤ化をもくろむシオニストの熾烈な攻撃に対し、UNLは国連事務総長がその阻止のため影響力を行使するようよびかける。ユネスコも、同市の歴史的・文明的特色の変容に早急に対処するよう、われわれは求める歴史的宣言を発した。

パレスチナの平和イニシアチブは、第四三回国連会議をもって世界から歓迎された。ほとんどの国がパレスチナ国家を承認し、外交関係・政治関係を樹立した。しかし、この平和イニシアチブの国際的承認にもかかわらず、また、公正な平和に対するわれらが真摯な意志を率直に訴えたパレスチナ大統領、ヤセル・アラファトの歴史的演説にもかかわらず、しかも、この演説が、米国政権にPLOとの公式対話を初めて受け入れさせたにもかかわらず、オスマエルの頑迷は、平和へのあらゆるイニシアチブと努力とを迷路に追いやった。

湾岸戦争や旧社会主義諸国の変貌等、ここ数年の地域的国際的激動は、従来の力関係を実質上変化させた。冷戦は終わり、地域紛争の平和的解決に向けた米ソ間協力に顕著なごとく、国際関係における新時代の幕が開き始めている。PLOは、こうした情勢の発展、および、それがパレスチナの大義とアラブイスラエル間に立とに及ぼす影響を注意深く見守ってきた。このことに関し、強調しておくべきことがある。

パレスチナ、そしてその人民の最低限の民族的政治的・人間的権利の強奪、剥奪は、旧世界秩序に

く計画からきており、各地での入植者リギヤングなどへの攻撃をもって地獄を現出し、計画に対する大規模な対峙を創り出さねばならない。UNLはガザとジェニンの大衆が示した占領に対する独創的な抵抗を称賛する。

UNLはタモン村での問題を、村と民族関係のためになるような方法で解決に導いた民族和解委員会の努力を高く評価する。そこで示された方法は、パレスチナ内部の諸問題を解決し民族的責任を担うにあたって理想的なものであると考える。

3. 國際的レベルで

UNLは、この間ソ連で起きた出来事についてPLOがとった立場を、正しいものと認められる。一連の出来事はわれらが友人の純然たる内部問題であり、他が干渉すべきことではないと考えるからである。ソビエト人民がこの困難に打ちかち、領土的意味においても、人民という意味においても統一した強固な存在として現われ、もって世界の解放闘争、なんなくPLOの支援者としての民族的役割を果たすであることをわれわれは確信している。

アラブの財産の漸次的接收とユダヤ化を通して、エルサレムのユダヤ化をもくろむシオニストの熾烈な攻撃に對し、UNLは国連事務総長がその阻止のため影響力を行使するようよびかける。ユネスコも、同市の歴史的・文明的特色の変容に早急に対処するよう、われわれは求められる歴史的宣言を発した。

人都市の内部にセツルメントをつくりあげてい

く計画からきており、各地での入植者リギヤングなどへの攻撃をもって地獄を現出し、計画に對する大規模な対峙を創り出さねばならない。

UNLはガザとジェニンの大衆が示した占領に対する独創的な抵抗を称賛する。

UNLはタモン村での問題を、村と民族関

係のためになるような方法で解決に導いた民族和解委員会の努力を高く評価する。そこで示された方法は、パレスチナ内部の諸問題を解決し民族的責任を担うにあたって理想的なものであると考える。

4. 活動方針

UNLは以下の諸活動を行うようわれらが大衆に訴える。

・七月第一週は獄中者との連帯週間である。

事務所でのストと会合が行われること。

・九月九日はインティファーダの四六カ月目突入を祝ってのゼネスト。

・九月七、一四、一五、二七日には、全商店は終日営業せねばならない。

・九月一五日はエルサレムの日である。西岸、ガザ、四八年被占領地からわれらが人民は聖地エルサレムに向かい、回教およびキリスト教の聖跡を訪れる。

・九月一七日はサabra・シャティーラ虐殺9週年、「黒い九月」一二周年のゼネストを行なう。

・九月二〇日は予言者生誕の日である。UNLはわれらが大衆の中の回教徒たちへ祝福を贈る。

・九月二三日はヘブロン中心部に対する野蛮なセツルメント攻撃に抗議してのゼネスト。

・九月二十四日はセツルメントと入植者リギヤングなどに対する軍事行動の一大エスカレーション。

ノの日である。

第二〇回パレスチナ国民会議(PNC) 最終政治声明(全訳)

エルサレムと殉教者の會議、アルジエ

一九九一年九月一日

六五年の誕生以来、パレスチナ革命は、われらが人民の犠牲に満ちた、長く困難な闘いの道を歩んできた。それ以前にはパレスチナの大義は、単なる難民問題としかみなされていかつた。

われらが唯一にして正当な代表、PLOの旗幟の下に闘われた、この、さまざまな形態をもつた長期戦の威信により、パレスチナの大義は、アラブ・イスラエル間対立の権利を有する民族の大義として国际社会に再生せしめられ、のみならず、アラブ・イスラエル間対立の核心的問題、その解消なくしては、土地も平和も安定も保障されえぬ問題として復活しえたのである。

この意味において、神聖にして大衆的民主的・インティファーダはパレスチナ民族闘争の創造的継続であり、全世界に衝撃を与えつつ切り拓くべき問題として復活しえたのである。

4. エルサレムを含む被占領地の内外からパレスチナ代表団を形成すること、また、対等な資格で、かつ権威の唯一の源泉たるにふさわしい形で和平過程に参加することは、そのための適切な方式の選択を含めて、パレスチナ人民のアラブ各国の立場が調整されること。

5. 一国間解決を排したアラブ・サミットの諸決議に則り、包括的解決達成を保証すべく、アラブ各國の立場が調整されること。

6. 解決は国際法の諸決議に基づいた最終的かつ包括的なものでなければならず、それゆえ、合意の内容の不可分性、諸細目間相互の連関性が事前に確認されねばならない。

以上の基本点に始まり、PLOは以下各項の実現をめざす。

1. 自由と独立の諸権利を保証するパレスチナ人民の自決権。

2. エルサレムを含む六七年占領地からのイスラエルの全面撤退。

3. 強制により発生させられたパレスチナ難民問題の、国連諸決議、なんなく総会決議一九四にそつた解決。

4. いかなる過渡的措置も、われらが人民の土地・水・資源に及ぼす主権、政治的経済的権限

さまざまな活動、たとえばRCS(赤三日月社)事務所でのストと会合が行われること。

・七月第一週は獄中者との連帯週間である。

事務所でのストと会合が行われること。

・九月九日はインティファーダの四六カ月目突入を祝ってのゼネスト。

・九月七、一四、一五、二七日には、全商店は終日営業せねばならない。

・九月一五日はエルサレムの日である。西岸、ガザ、四八年被占領地からわれらが人民は聖地エルサレムに向かい、回教およびキリスト教の聖跡を訪れる。

・九月一七日はサabra・シャティーラ虐殺9週年、「黒い九月」一二周年のゼネストを行なう。

・九月二〇日は予言者生誕の日である。UNLはわれらが大衆の中の回教徒たちへ祝福を贈る。

・九月二三日はヘブロン中心部に対する野蛮なセツルメント攻撃に抗議してのゼネスト。

・九月二十四日はセツルメントと入植者リギヤングなどに対する軍事行動の一大エスカレーション。

一九九一年九月一日

・九月二九日はPLOへの誓いを新たにし、被占領地内外のわれらが人民の團結を強調する東下におこすとするものである。アラブ連盟に對しても、われわれはイラク人民のこうした困チナ旗がかけられるだろう。

UNL・パレスチナ国

子をはじめとする人々の生活をまひさせている経済封鎖を即刻解除するよう訴える。また、アラブの民衆と兄弟諸国がイラクへの援助を拡大すること、イラクの内政へのいっさいの干渉を停止すること、アラブの團結回復に向けて真摯にかつより粘り強く努めることを訴える。

—PNCは、パレスチナ—ヨルダン間の兄弟的友愛関係を讃え、その全分野にわたる強化と深化を呼びかける。われわれは、両者の間に存在する特別な、他とは識別される糸に触れたPNCの過去の諸決議を改めて強調するとともに、PLOとヨルダン間の協力を全次元において、継続・発展させるよう訴える。パレスチナとヨルダンの両国関係の将来にわたる基礎を連邦制に求めたPNCの過去の諸決議も、また、強調される。

—PNCは、パレスチナの大義のために犠牲を払ってくれたレバノン人民を讃えるとともに、レバノンの国民和解、主権回復の成功を願い、南部解放と安保理決議四二五の完全実施への全面的支持を表明する。同時に、パレスチナ人民の政治的、軍事的、社会的諸権利と、レバノン当局との緊密な協力をもつてするパレスチナ・キャンプのイスラエルからの安全を保証する新しい基礎の上に、レバノン・パレスチナ両人民間の友愛を築くよう呼びかける。PNCはこの機会を借り、相互に関わる問題の建設的解決のため、レバノン政府とPLOの対話を完結させる必要を訴える。

関わるアラブ五ヵ国（ヨルダン、エジプト、シリヤ、レバノン、パレスチナ）に対し、来るべき政治過程からの挑戦に応じるために、また、交渉に臨むアラブの立場を一本化させるために、最高度の政治的外交的調整を相互間で行うよう訴える。

IPNCは、再度にわたってエジプトで開かれたアラブ外相会議の重要性を高く評価する。エジプトは、アラブの統一と団結の復活に、今なお、実質的、本質的役割を演じており、わが人民の民族的権利実現に向けての、その立場と努力は、高く評価される。

IPNCは、共通の、かつまたアラブ全体の利益に奉仕し、新たな挑戦に打ち勝つようシリア・パレスチナ間の関係強化とシリヤ・PLO間の調整の高度化を目指す努力の継続を呼びかける。

IPNCは、長期にわたって拡大されてきたサウジアラビアによるパレスチナ人民とPLOへの支援、並びにわれらが国民の労働と居住に対する暖かな受容と便宜改善の努力を高く評価するとともに、神聖なるインティファーダへの支援を継続し、もって、われらが大衆が、イスラエル占領当局による飢餓戦争への着手と経済基盤破壊の企てとに対し、打ち勝つように援助されんことを期待する。

われわれは、他の沿岸協力会議諸国との兄弟的関係の復活と改善をも、期待をもつて展望する。

IPNCは、イエメン、スー丹両国の人民・政府・大統領に、われらが部隊駐屯への便宜供与並びに、困難な条件下にもかかわらずなされんことを期待する。

P N C はわが人民の権利を支持するバチカンおよび法王猊下の立場をきわめて高く評価する。統一民族指導部は、ユダヤ人の組織的入植・移入問題に関し、イスラエルによるその拡張主義的目的への悪用や、結果として起くるわれらが人民の民族的郷土に対する自決権のさん奪を阻むため、国際社会が声を上げることを訴える。

イスラエルの入植地拡大強化計画にそつた、この移民流入の継続は、地域の平和的将来に対する主要な障害と脅威をなすものであり、パレスチナ人の人権と国際諸条約に対する侵犯でもある。

P N C は、国際社会の一部に、シオニズムは人種主義の一形態であるとした国連総会決議の破棄を企てる動きのあることを指摘するとともに、P L O 執行委員会が友好国、兄弟国と共同して、これを破碎することを求める。

P N C は、平等、正義、民主、そして国際社会の中での他と平等な地位を求めるさまざまな人民のあらゆる闘争を讃えるとともに、アフリカ民族会議 (A N C) と高名なアフリカ人戦士ネルソン・マンデラに率いられた南アフリカ人民へのあらゆる支援を継続する高く評価する。この場をかりて、われらが人民の全面的連帯の意を表し、彼ら南アフリカの戦闘的人民へのあらゆる支援を継続する重要性を強く訴えると同時に、侵略と人種主義に対決しているアフリカ各国への連帯を表明する。

— 15 —

PNCの諸決議にそった和平達成に向け最良のこと。

6 国連安保理決議四六五を含む国際法に則つた諸決議は、現存する入植地のすべてを非合法としている。その撤去についての保証を用意すこと。

5 自決権の遂行を可能ならしめるための準備段階として、パレスチナ人民に国際的保護を与えること。

るとともに、現在、軍事部門を確立しつゝ、人民委員会の発展を継続させている統一民族指導部の強化をとりわけ強く訴える。インティイファードの防衛・発展は、現在もなおパレスチナ民族行動の最優先課題である。

われらが殉教者に打ち続く獄中の英雄たち、負傷者たちに賞賛を贈る。抑圧・差別政策に抗する一方、インティイファードへの実効ある支援をも担つているガレリー、三角地帯、ネゲブ、

P N C は、また、パレスチナの大義への支援と中東関連の国際的諸決議の遵守とにおいて、ソ連、中国、非同盟諸国、アフリカ諸国、イスラム諸国会議が果たした役割に感謝する。P L O のアラブ諸国との関係について、P N C は以下決定した。

一 一五〇万にのぼる殉難者を出しながら自由と独立の旗を打ち立てて以降、アルジェリアが示

域の安定確保とに貢献することになるだろう。PNCは、また、パレスチナの大義への支援と中東関連の国際的諸決議の遵守とにおいて、ソ連、中国、非同盟諸国、アフリカ諸国、イスラム諸国会議が果たした役割に感謝する。PLOのアラブ諸国との関係について、PNCは以下決定した。

一五〇万にのぼる殉難者を出しながら自由と独立の旗を打ち立てて以降、アルジェリアが示してくれたパレスチナの大義への暖かな理解と継続した支援、一再ならぬPNC開催への便宜供与に対し、PNCは大統領、政府、人民に厚く敬意と感謝を表する。

一PNCは、チュニジアの大統領、政府、人民に対しても、等しく敬意と謝意を表する。PLO指導部に暖かな理解を示し、我が大義のために多大な犠牲を払った彼らの友愛は忘れない。

一被占領地内外のわが人民とPLOへの継続した支援に対し、モロッコ国王にしてエルサレム委員会の長たるハッサン二世陛下に感謝したい。

一PNCは、インティファーダへのリビアによる継続した支援を高く評価する。

一PNCは、マグレブ同盟諸国によるパレスチナの大義とPLOに対する変わらぬ支援に厚く敬意と感謝を表するとともに、アラブの団結の回復に関し演じられたこれらの国の活発な役割を高く評価する。

一PNCは、苦境にあるわれらが兄弟・イラク人民との強い連帯を表明する。われわれは、国際社会ごとく、食品・医薬品などを供給し、帰入

外国支配、植民地化、人種差別に抗し、独立をから取るための人民の抵抗権は国連決議で強調されるところであり、PNCは、これらの決議を堅持する一方、国家テロを含むいさいのテロリズムを拒否することを重ねて表明する。

最後に、PNCは、占領下にあり、あるいは離散の中にはなお、堅忍不拔、不とう不屈たるわれらが人民、そして、彼らの闘いと彼らの権利回復に支持と援助とを惜しまぬアラブ大衆に、賞賛と感謝を表明する。そして、アラブの生存と尊厳を守るために、敵の陰謀に断固立ちはだかるのことをこれら人民大衆に呼びかけつゝ、われわれは、平和と自由を求める全世界の実直にして友好的な諸勢力に対し、われらが大義に組する名譽ある立場をとったことに、最大の敬意と謝意を表明するものである。

重要日誌

一九九一年九月一〇日
一〇月一〇日

- 九月一〇日（火）～一一日（水）
 - DFLP（アブド・ラボ派）の大会、ラボ派はML主義を降ろし、民主、自由、進歩を掲げる、DFLPを名乗るなどを発表。
- 九月一三日（金）
 - 南部レバノン、ファタハ部隊が海からの攻撃に失敗。ナクーラでUNIFIL兵一二名を人質に立てこもる。イスラエル、SLAはUNの交渉による打開工作を無視して攻撃。UNのスウェーデン兵一名死亡、UN兵七名とコマンド三名が負傷。

- 九月一四日（土）
 - 西岸、ジエニン地区でイスラエルのパトロール部隊への発砲。兵一名が射殺された。
- 九月一五日（日）
 - 無任所大臣ゼーヴィ、ブッシュを非難。極右の米国非難高まる。
- 九月一六日（月）
 - ベーカー、湾岸戦争後七回目の中東歴訪開始。
- 九月二三日（月）～一八日（土）
 - 第二〇回パレスチナ国民会議（PNC）。
- 九月二四日（火）
 - レバノン、西側人質の一人生ジャック・マン氏（英国人）釈放される。
- 九月二八日（土）
 - ファイサル・フセイニ氏、「アシュラウイ女史と自分は、米国によって代表として承認されることになろう」と楽観的。
 - イスラエル政府報道官、「PLOは政治過程の外であり、PNCの後も外でありつづける……われわれの立場は少しも変わらない」
 - サウジアラビア、PLO基金約九〇〇〇万ドルの凍結解除。
- 九月二九日（日）
 - ジブリル総司令部派書記長とアブ・ムーサ（ファタハ反乱派代表）ムサウイ・ハズバッラー書記長、共同記者会見でPNC決議を投降主義と非難。
- 九月三〇日（月）
 - イラン、イラン政府がパレスチナ人民の闘い支援の国際会議を主催すると発表。
 - ハマス、PNC決議は投降主義と非難声明。

- 一〇月二日（水）
 - DFLPハワトメ派、イスラエル兵（ドルーズ）の遺体返還。
 - 米国ABC-TV、イラン-コントラのビデオテープ放映。
- 一〇月三日（木）
 - 米国、一〇〇名以上の在米ユダヤ人が、イスラエルにセツルメント凍結を訴えた。
- 一〇月六日（日）
 - ベリーリアマル指導者とムサウイ・ハズバラ書記長、共同記者会見で、対イスラエルの共同武装闘争を開いていくと発表。
 - イスラエル法廷、和平運動家エヴィ・ナタン氏に「敵（アラファト議長）と会った」罪で一八カ月の禁固。
- 一〇月七日（月）
 - ヨルダン、下院議員八〇名中四九名の署名による、内閣総辞職要求。
 - 被占領地、PFLPの領内機関誌「永続革命」でアシュラウイ女史に非難と警告。
- 一〇月八日（火）
 - アル・アクサモスク虐殺一周年、パレスチナ側はゼネスト。
 - イラク、国連安理会にイスラエル機四機による領空侵犯に抗議の提訴。
- 一〇月九日（水）
 - エルサレム、クネセット議員四名を含む極右入植者約五〇名がアラブ人住居を武装占拠。
 - ヨルダン、一一日予定の和平会議反対の集会、デモの禁止、二つの新聞の発禁。そして、一〇日に予定の和平会議に向けた国民大会は、フェセインの風邪を理由に延期。
- 一〇月一〇日（木）
 - デクレアル国連事務局長、レバノン政府軍のUNIFILゾーンへの展開要請を却下。
 - 米国国務省、和平会議に対する拒否派や過激派のテロを警告。